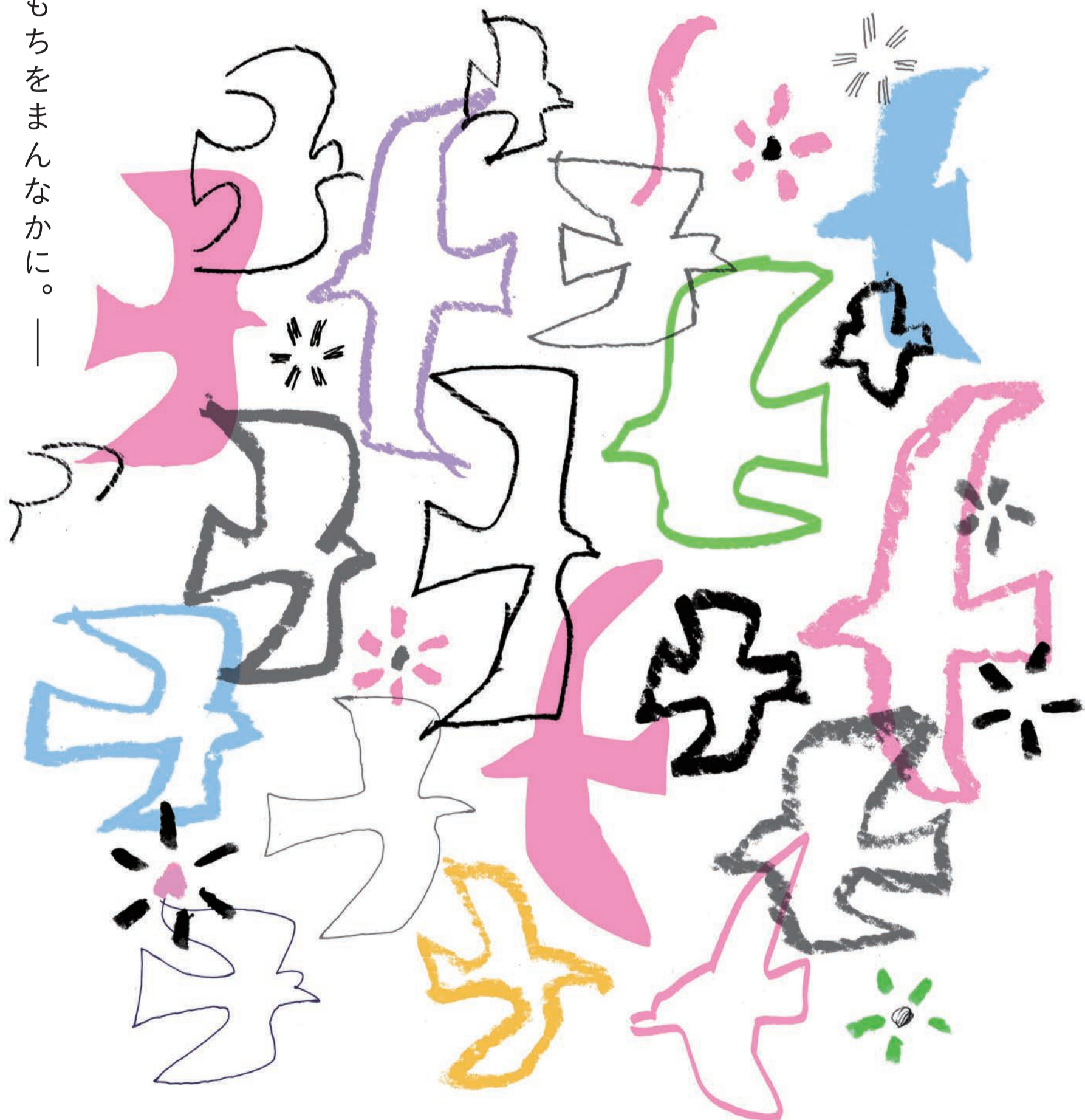


ありのままの感情に向きあう授業

わたしのリアル

W A T A S H I n o R E A L

— すなおなきもちをまんやかに。 —



息苦しいのも無理はない。大人もこんなに息苦しい

35万人もの小中学生が不登校。高校生は7万人。学校を早退する、長期欠席しているなど、不登校傾向にあるこどもたちを含めると50万人以上といわれています。また、2024年には小中高生の自殺者数が過去最多に。こどもの人口が減っているにもかかわらず、です。G7各国のなかで唯一日本だけが、10歳～19歳の死因の1位が「自殺」だったことも、記憶に新しいと思います。

さまざまな困難や生きづらさが要因として挙げられるのはいうまでもなく、一見では困りごとを抱えていなさそうなこどもたちでさえも、誰にも言えない苦勞を感じていることも少なくありません。その背景には、異なる価値観との分断や単一の価値観や属性に縛られ、いつ自分が排除されるかわからない不安や息苦しさが往々にしてあるのではないのでしょうか。

福祉のリアルが、気持ちのフタを取り払う

10数年前からはじまった「福祉教育」は、福祉の人材確保をめざし、小中高生に福祉の仕事の魅力を知ってもらう場でもあります。「福祉教育」というと、車いすやアイマスク体験のイメージが濃いかもしれません。しかし、私たちの出前授業では、障がいや生きづらさを抱える当事者や福祉現場の支援者を講師として招き、彼らの人生そのものを、またその半生で感じたリアルな気持ちを語ってもらうことを、主たる内容としています。実際に出前授業で訪問した学生や教員の方々から、「福祉のイメージが変わった」という声を多数いただきながら今日に至ります。

一方で、授業を終えるたびに、こどもたち・若者たちから、おそらくふだんは人に言わないような言葉で、さまざまな感情が寄せられます。講師の当事者と自分の人生を重ね合わせ、生きづらさや困難をカミングアウトする声も多数あります。「福祉のリアル」と出会ったこどもたちの表情をみると、おそらくこの授業は、こどもたちの抱える生きづらさや、現代のこどもを取り巻く厳しい課題に対して有効なのではないかと感じるようになりました。

こどもたちのリアルな気持ちを、大人がもっと大切にする

「福祉教育」の出前授業において、私たちが大切にしていること。それは、「福祉のリアル」に出会ったときの、こどもたちの多様な受け止めかたを大切にする。大人たちの「こう感じてほしい」や「こう思っちゃいけない」という恣意的な誘導はやめること。むしろ大人たちは、目の前のこどもたちのリアルに気持ちにこそ、一生懸命向きあってもらいたいと考えています。

今回開催しました「わたしのリアル」からはじまる福祉教育フォーラムでは、そんな私たちの実践が「どのように？」あるいは「なぜ？」こどもたち・若者の心を揺さぶっているのかを統括する機会として設けられました。ありのままの感情、ありのままの自分を「いていいんだ」と肯定できる入口となること。それは、“しあわせに生きるためのヒント”を知ること。社会を変えていくという視座よりも、一人のしあわせを足元から見つめ、結果、社会にひとつの気づきを芽生えさせていく。フォーラムを通じて、そんな「福祉教育」の側面に出会えたように思います。

この取り組みで、いっしょに大切にしたいこと

1 リアルな出会いをつくること

障がいのある方、高齢者等の当事者のリアルな生き方、社会のリアル、地域のリアル、暮らしのリアル、自分のリアルなど、本物との出会いを大切にします。

2 自分のリアルな感情を受け入れること

「リアル」にふれ、湧き出た“生徒のいかなる感情”も大切にします。
だから、大人たちの「こう思っしてほしい」はそっとしまっておいてください。
まずはどんな意見も感情も肯定することが大事。

3 楽しむ力を育む授業であること

「そんなこと言っちゃいけない」や「そんなこと聞いちゃいけない」はいったんやめて、生徒たちの豊かな感情を楽しみ、多様な感情の捉え方を楽しみます。

自分を肯定し、安心しながら自分と他者と向きあえる環境。
その先に...

多様な他者を受け入れ、「わたし」と社会との良好な関係を築く。
生きる力と、ともに生きていく力を育みます。

01

こどもたちのいま

「いい」という

世界観をどうつくるか



野澤 和弘 氏
植草学園大学副学長

村木 厚子 氏
全国社会福祉協議会会長

第1部では、全国社会福祉協議会会長・村木厚子さん、植草学園大学副学長・野澤和弘さんが登壇。当事者理解を促す学校の授業が、こどもたち自身の生きづらさと、そこから前を向いていくプロセスに。これからの時代をこどもたちが幸せに生きていくための、教育現場の再構築に向けた視座を、福祉教育のありかたから多角的に問い直しました。

「誰にも言えない」に向きあえる時間 福祉を通して、 自分と向きあうきっかけに!?

人材確保の取り組みから、福祉と関わりはじめた野澤さん。最初は「中高生たちに福祉の仕事将来の選択肢として選んでもらえたら」という思いでしたが、実際に出前授業などで学校を訪問して感じたのは、多くの学生たちが感じている“生きづらさ”だったといいます。

野澤さん「障がいのある人のことや障がい者支援の仕事の話は、中高生たちにとっても響いているように感じます。学生たちそれぞれに、誰にも言えない悩みがある。実は自分が貧困であることや、家族のことで悩んでいる子どもももちろんいる。そんな子どもたちが障害のある当事者や、福祉の仕事と呼ばれるものに出会うこと

で、自分や自分の悩みと向きあう機会が得られたと言うんです。そんなことが全国各地で起こるわけだから、福祉というものを伝え、知ってもらうことは、現代のこどもたちに必要なことだと感じています」

体が不自由でありながら、まるで心に翼をもったように全国を飛びまわり活動している障がい者もいる。その姿を突きつけられたときに、「何もできないってどういうことなんだろう」「人間が生きることってなんだろう」ということを自分の頭で考え、本気で自分に向きあうようになる。そういう体験が、中高生たちの心に響いているのではと野澤さんは指摘します。

福祉に出会い、自分と向きあう。津田塾大学で客員教授を務める村木さんも、担当する授業で同じような経

験があったとこう続けます。

村木さん「大学でも、児童養護に携わる専門家をゲストにお招きすることがあるんですが、授業後の学生たちの感想文には、必ずといっていいほど何かしらのカミングアウトが書かれています。これまで誰に相談していいのかわからなかったけれど相談していいですか?というような話が実際に少なくないですね」

一方、2024年度の文科省の調査では、不登校を選択する小中高生は約37万人といわれています。そのなかで高校生の不登校は、小中学生の割合に対しては少ないそうです。

村木さん「なんで高校生になると不登校が少し減るのか。不登校ジャーナリストの石井しこうさんの言葉をかりれば“多様な選択肢と最終的な非常口があるから”。本当にそうですね。高校には通信制も定時制も単位制もある。最終的に通えなかったら認定試験もあり、選択肢が小中学校より多いんですね。逃げ場を見つけられるのは、教育の中でもすごく大事なことだと思います」

いま社会で起きている福祉的な課題や、実際に困りごとを抱える当事者と対峙する。そういった「リアルな出会い」を授業を通じて体験することで、自分の素直な気持ちや、ありのままの自分の姿を受け入れられるようになる。画一的でない多様な価値観と出会うことで、自分と向きあ



えるようになる。そんな福祉の可能性が見えてきます。

ここにいい、という世界観 お互いを知ること、 自分の居場所が見えてくる

野澤さんのゼミ卒業生のAさん。現在は小学校の教員をしています。Aさんは出生時に割り当てられた性別は女性ですがトランスジェンダーで、発達障害もありました。

野澤さん「Aさんは小中学校にほとんど行ってなくて、教育学部なんですけど最初は学校の先生に興味なかった。けれどもうちの大学には、兄弟や家族に障害のある人がいる学生が多いんです。そうするとわかりあえるから居心地がよくなって自己肯定感が高まってくる。さらに特別支援学級の実習で“学校ってこんなにおもしろかったのか!”って目覚めちゃったんですね。音楽の授業で自分の女性の歌声にダメージをうけるなど、いろいろあったけれども教員採用試験に合格。先日久しぶりに会いましたが、とてもいきいきとしていました。なんでそんなに元気



なの？って聞くと、最初から寝てる子や大声出して教室から出ていく子、学校に行きたくない子など、ほかの先生はお手上げ状態。でも、Aさんにとっては自分を見ているようですごく気持ちがわかるんだと。だから子どもたちはもちろん保護者からも信頼されていて、とても自信をつけたようでした。そう考えると、勉強だけ熱心にやってきた先生のほうがむしろ大丈夫なのかな？って思ったりもするんですよね」

村木さん「最近読んだ生命誌研究館の中村桂子さんの本に、“科学者はずっと生活実感と世界観をもつことが大事だ”というようなことが書いてあったんですね。それで思い浮かんだのが、社会福祉法人ゆうゆうの大原さんが10数年前に出前授業でやった“椅子取りゲーム”。これはただの椅子取りゲームではなくて、椅子が1つずつ減っていくなかでクラス全員が椅子の上に乗って、5秒間足を床につけずにいられたら成功というもの。このゲームでどういうクラスがうまくいくのかというと、強いリーダーがいるクラスよりも、お互いのことをよく知っているクラスなんです。限りある椅子の数で、どうすればみんなで幸せになれるか。そういう“世界観”が、すごくわかりやすくできています」

価値観の押しつけではなく、みんなで共有できる世界観を、大人もこ

ども一緒に体験しながらつくっていくのが、福祉教育の魅力だと村木さんは語ります。

**“心地よい停滞”をわかちあおう
「わたし」という多様性を認め、共に生きること**

これからの学校教育には、限られた椅子を自分だけが勝ち取る知恵を教えるのではなく、どうみんなでわかちあえるかを考えることが大切。そんな思いを重ねながら、野澤さんはこう続けます。

野澤さん「元文化庁長官の青柳正規さんは、“もしも人類が生き延びられるとすれば、心地よい停滞を引き受けられるかどうかだ”とおっしゃってるんですね。僕はその言葉が、アール・ブリュットにも通じる気がして。なぜなら知的障害のある人の芸術作品というのは、名声やお金を得ようと思ってつくってないでしょう。ユーモラスで、おおらかで。障害のある人たちの存在が、子どもたちの心に響くのは、そのあたりにあるんじゃないか。子どもたちは、大人たちよりもずっと心地よい停滞をリアルに感じているんじゃないか。そんな気がしています」

村木さん「青柳さんはまた、“多様性こそが、生物が生き残るための鍵”というようなこともおっしゃ



っていますね。なぜなら生物は生き残るためにランダムに遺伝子を変化させるから。突然変異を起こして違うタイプの生物を生み出すんです」

野澤さん「それでいくと、こどものころってもっといろんな人がいたと思うんです。それこそ変な人もいっぱいいた。でも今は学校も教育も変わり、中学、高校、大学と進むうちにだんだん似たもの同士になっていくんですよ」

そして、気づけば暗黙知となっているスクールカーストができていたりする。そんな序列化や同質性を溶かし、多様性を認める環境をつくるのが福祉教育の役割なんじゃないかと、お二人は語ります。

**弱さをみせられる場所を再構築する
役に立たなくなつて、
きみは大事な存在なんだ**

他人の目や自分が役に立っているかを、現代の若者は異常に気にしている。若者の自己肯定感の低さと重ねながら、野澤さんは指摘します。

野澤さん「誰かの役に立たなくなつてみんな大事な存在。そう思わせてくれない社会が、子どもたちを取り巻く環境の土台になっている気がして。いていいんだ。失敗した自分、惨めな自分、嫌な自分。そんな自分を受け入れたときに、だんだん自分のことが愛おしくなってくる。そんな経験ができる社会そのものを再構築する必要があると思います」

村木さん「自分をさらけ出すことで、まわりの人も解放されていくというか。あるべき大きな姿を遠くのほうに眺めるんじゃなくて、足元を見つめ自分の弱さから出発してみる。そんな教育が求められているのかもかもしれません」

福祉教育の世界観が、子どもたちの人生によりよい影響を与えていく。その可能性をイメージできるセッションとなりました。



村木 厚子氏

1955年高知県生まれ。高知大学卒業後、労働省（現・厚生労働省）に入省。障がい者政策や雇用均等、児童家庭に関する政策などに関わる。2009年、郵便不正事件で逮捕・起訴されるも、2010年に無罪が確定、復職。厚生事務次官などを歴任し、2015年に退官。2023年に全国社会福祉協議会会長に就任。津田塾大学客員教授。著書に、『あきらめない 働くあなたに贈る真実のメッセージ』（日経BP社）、『日本型組織の病を考える』（角川新書）などがある。



野澤 和弘氏

1959年静岡県生まれ。早稲田大学卒業後、毎日新聞入社。いじめ、ひきこもり、児童虐待、障害者虐待などを報道する。論説委員（社会保障担当）を11年間務め、2019年10月退社。現在は植草学園大学副学長・教授。東京大学「障害者のリアルに迫るゼミ」顧問、上智大非常勤講師、社会保障審議会障害者部会委員なども務めている。著書に、『障害者のリアル×東大生のリアル』（共著／ぶどう社）、『弱さを愛せる社会へ一分断の時代を超える「令和の幸福論」』（中央法規出版）などがある。



福祉が

彼らにもたらしたものの

菅野 那乃氏

市立札幌大通高等学校2年

山崎 優輝氏

北海道医療大学看護福祉学部福祉マネジメント学科4年

丹羽 美貴氏

東京大学前期教養学部文科III類2年

御代田 太一氏

障害者のリアルに迫る東大ゼミOB・主任講師

第2部では、それぞれの困難や苦勞に向き合う3名の学生が登壇しました。「強迫性障害と不安」「祖父母の看取り」「無気力」と対峙するなかで、彼らがどう感じてきたのか。また、どのようにして福祉と出会い、彼らにどのような影響を与えてきたのか。三人三様の実体験をふまえながら語っていただきました。

自己紹介

セッション、スタート!

進行を務める御代田さんは、第1部で登壇された野澤和弘さんが講師の「障害者のリアルに迫るゼミ」のOBで現在はコーディネーターをしています。「彼らの等身大の姿をみていただき、彼らにみえている景色を感じてもらえればと思います」という御代田さんの進行により、まずは自己紹介からセッションははじまりました。

菅野さん「北海道から来ました。札幌大通高校2年生の菅野那乃と申します。私は自分のことを「不登校アマチュア」と呼んでいて、中学校3年生くらいから学校に行けない時期が続いていました。父の知り合いのすすめで「当事者研究」に出会い、そこから人生が大きく変わっていき

ました。私は当事者研究が大好きで、自分の救いになっています。今日は、私の大好きな当事者研究のことや、当事者研究を通じて私がどう変わっていったのかということ、当事者研究の魅力も交えながらお話できればと思います。よろしくお願いします」

山崎さん「こんにちは。無気力な大学生代表の北海道医療大学4年の山崎優輝と申します。今日お話しするのは、高校1年生から大学2年生あたりまで僕が抱えてきた「無気力」というものを、大学のゼミに入ってから紹介されたこどもの居場所支援を通して、無気力を徐々に克服していった経験。その経験から「若者の無気力」に対して福祉活動が効果的なのではないかという卒論を書きました。この話を軸に福祉活動の価値みたいなものをお話できたらと思っ

ています。よろしくお願いします」

丹羽さん「東京大学前期教養学部文科III類2年の丹羽美貴と申します。御代田さんがコーディネーターをされている「障害者のリアルに迫るゼミ」の副代表をしています。野澤さん、御代田さん、そして生きづらさを抱える人たちといっしょに授業をつくっていく、対話をしていくという活動を日々行っています。今日はそうしたゼミのお話や、私自身がどういうふうに出会ったのか、どんなふうに関心という分野に興味をもったかについて経験を交えてお話できたらと思っています。どうぞよろしくお願いいたします」

菅野那乃さん
当事者研究と出会い、
不安の専門家になる

「当事者研究」とは、もともとは精神障害を持つ人たちが生きづらさを解消するために生まれた、自分の苦勞を自分で語ろうと方法論のことをいいます。北海道にある精神障害などを抱えた当事者の地域活動拠点「べてるの家」からはじまった取り組みで、今やいろんな分野へ広がりをみせています。それでは菅野さんの当事者研究をお聞きください。

菅野さん「ありがとうございます。私は幼い頃から強迫性障害という障害を患っていて、当事者研究に出会う前から散々いろんなカウンセリングだとか病院だとかお薬だとか、さ



まざままなものを試してきましたが、自分にあうものはほとんどありませんでした。そして最後の砦のように、当事者研究というものに出会いました。当事者研究用語で「〇〇の専門家」というのがあり、たとえば罪悪感の専門家などいろんな専門家がいますが、そのなかで私は「不安の専門家」として当事者研究を行っています。幼い頃からずっと不安を抱えていて、たとえば包丁やナイフなどの刃物がとにかく怖くて、もしこれをもとに戻すときに誰かを傷つけてしまうんじゃないかと、テレビで大きな事故や事件があったら、もしかしたら自分も関わってるんじゃないかと本気で心配してみたりとか。あと最近でいえば今でも続いているのが、セルフレジが本当に怖くて。もし盗もうとしてなくても盗んでしまっていたらどうしようと思い、今でも自分がまだ絶対どこかで盗んでしまってるんじゃないかなという不安が拭いきれずにいます。そんな自分自身の抱える不安を研究するために、私の今まで生きてきた17年間の心の状態をハートで表したグラフをつくっています」





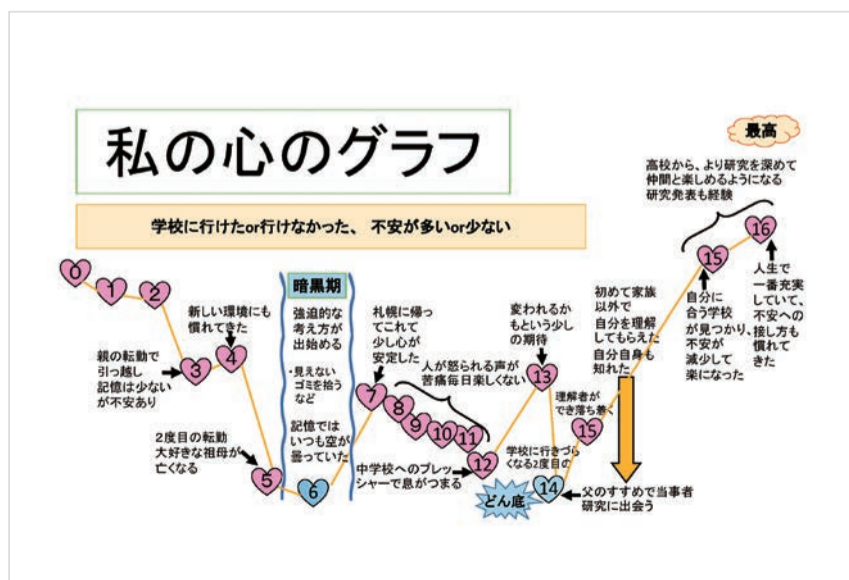
「学校に行けたor行けなかった」「その時々で不安が多いor少ない」を基準に作成されている心のグラフ。3歳頃から不安を自覚し、6歳にはカーペットが汚れてると信じ見えないゴミを拾うなど、強迫的な考えかたが出始めた菅野さん。小学生の頃から学校が苦手な中で中学校では不登校になり、中学校3年生の冬に当事者研究と出会い、家族以外の理解者もできてハートのグラフが右肩上がりになったといいます。

人の苦勞を笑っていいんだと、視点を改めて不安と付き合ってみる

菅野さん「最初、当事者研究のグループに初めて行った日のことを今でも鮮明に覚えています。みんなすっ

ごいお菓子を食べていました。大人ってそんなお菓子食べるっけ！？と、いい意味でもびっくりしました(笑)さらには、自分の苦しんでいる話をしたら相手はしみみりすると思いきや、「最近こういう苦勞きたんだよね〜」ってなかなか重たい内容の話をしているのに、みんなゲラゲラ人の苦勞を笑っていたんです。その感覚がとてもおもしろくて、笑っていいんだと思うと同時に、でも笑わないと苦勞って大変だよな。そう思い、こういう場って本当に大事だなと感じました」

当事者研究では、さまざまな実験も行うそうです。たとえば菅野さんの場合、不安がやってきても放置してみる「不安にずぼらになる」ことや「不安をデコって名前をつけること」



菅野さんの今まで生きてきた17年間の心の状態をハートで表したグラフ自分を俯瞰して見ることができる

など。自分の苦勞を、そのままの苦勞として向きあうのではなく、すこし視点を変えておもしろがりながら対峙することで「不安」と付き合うハードルを少し下げられる！？そんな工夫が印象的でした。

不安にズボラになってみたり、不安に名前をつけてみたり

菅野さん「当事者研究の実験をしました。「不安に対してズボラになってみよう」ということで、私自身の性格がだいぶ面倒くさがり屋なので、その性格を不安に対しても適用してみようと思ったんです。今までは不安に対して、そろそろ来そうだなと思ったらいろんな準備をしたり、いろんなことを試していたりしたんですけど、そうすると逆に抵抗力といいますか、不安がどんどん膨らんでいってしまっ。なのでもう身構えずに、不安が来てもそのままさらっと流すように、そのまま放っておくっていうのをやってみたら、これが意外に結構うまくいって、最近はこれをずっとやっています。実験の2つめは、当事者研究の代表的なやりかたのひとつに、自分の病氣や苦勞に名前をつけてみる、という方法があります。たとえば、「最近お客さん入ってきたんだよね〜」って病氣のことを「お客さん」と呼んでみたり。こういう感じで、私は不安の専門なので、不安のことを「落とし込み系女子ファンシーブアンコちゃん(不安視不安子)」というキャラクターをつくってみました。「ファンシー来たな〜」とか言っているんですけど、そういうふうになんか名前をつけてあげることによって「すごい不安来たんだよね」っていうよりも、「ファンシーブアンコちゃん」と呼んでみるだけでけっこうとらえかたが変わるんですね。当事者研究仲間にもやっぱり言いづらいことはたくさんあって、それを「不安が最近本当にひどくてさ」と話すよりも、ちょっとふざけてるようにみえるかもしれませんが、本当にとても効くのでいいなと思っています」

日々アップデートする不安に負けないよう、当事者研究を毎日のルーティンに

菅野さん「いろんな実験をしてきましたが、それでも私はこれまで生まれてからずっと不安と向きあい続け、不安と一緒に生きてきました。だから、もしかしたら、安心していう状態のときよりも、不安の状態のときのほうが、実は私には安心なんじゃないかと考えています。不安を嫌っているけれど、不安なしじゃ生きられない体になってるんじゃないかな、なんて思っています。最近は、自分のなかで感受力が高すぎるせいで不安を感じていると思ったので、鈍感力というものを身につけたいなと思っています。不安に対して、鈍感になってみるという実験です。私の不安や苦勞や悩みは毎日どんどん変わっていて、明日にはどんなかたちになっているか想像が付きません。だから、これに負けないようにがんばって当事者研究をしているという感覚も持っています。当事者研究は私にとって義務でもやらなきゃいけない治療でもなんでもなくて、ただの趣味だというふうにとらえています。少しでも当事者研究の魅力が伝わればいいなと思います。ありがとうございました」

丹羽美貴さん 祖父母との別れが教えてくれたこと

丹羽さんは、高校生のときから、東京大学で行われている「障害者のリアルに迫るゼミ」を知っており、大学に合格したら受講しようと考えていたそうです。そう思うに至るまでには、祖父母の看取りという高校時代の経験から感じた、さまざまな悩みや気づきが背景にありました。

死と向きあえなかった祖父の看取り

丹羽さん「これから私自身の「祖父母との別れ」というテーマでお話を



させていただこうかと思います。高校2年生のときに、まず祖父との別れ、そして一昨年の末に祖母との別れを経験して、まだ自分自身で正直受け止めきれていない部分もあるんですが、ひとつ大きく学んだことがあったので、みなさんにシェアしたいなと思います。まず祖父と祖母のふたりとも在宅介護で看取りました。主に母と母の兄弟が介護をしていました。私もその近くで関わっているなかで強く印象に残っていることが、祖父が自ら透析をやめる決断をしたことでした。いつか祖父がいなくなってしまうんじゃないかというところがすごく怖かったからこそ、透析をやめるという祖父の決断が私にとってはすごく衝撃的で。透析をやめてしまったら、その後だんだん弱ってしまいます。それって自分の人生を全うしているのかと思うのと同時に、ものすごく大きな恐怖を感じました。それから約1週間後に祖父は息を引き取ったんですが、死への恐怖や介護に対して漠然としたマイナスなイメージが拭いきれませんでした」

ポジティブな気持ちになれた 祖母の看取り

丹羽さん「祖父の死から2年後の私が大学1年生のときに祖母が亡くなるんですが、祖母も同じように在宅介護をしていました。最期をどう迎えるか家族で話しあい、自宅でいい最期を迎えようということになりました。そのときに、私のなかでポジティブな気持ちが湧き上がってきたんですね。もちろんお別れはすごく悲しいのですが、お家で看取れるってとても嬉しいことだなんて思えたんです。高校生の自分は介護というものをネガティブなものとしてとらえていましたが、いろんなサービスや制度を知り、介護へのイメージも変化していきました。祖母が弱っていく姿をみるのは辛かったのですが、自宅で最期を迎えることができました。祖父のときは、最期のお別れが怖いという気持ちが勝ってしまい、少し逃げてしまった。それを今でも後悔しているから、今度は最後までいっしょにいてあげようという気持ちでした」

別れを受け入れ、 自分の言葉で語れるように

丹羽さん「祖父母の介護をする母をみて、介護の問題にも興味をもつようになりました。介助者という立場の当事者性だったり、在宅で看取ることが大変なことに語られがちなことだったり。でも介護にはとても嬉しい時間や、人生の最期を身をもって家族に教えてくれる本人の姿。そんな機会を私は感じて、やっと最近、自分の言葉で語れるようになりました」

看取りを通して死から目をそらすことと向きあうこと。その両方の経験を経て、感じたことを丁寧に言語化している姿が印象的でした。自身の経験から生まれた介護への問題意識を、これからの学びに活かしていきたい。そんな想いも語っていただきました。

山崎優輝さん 無気力代表の 大学生がみていた景色

高校時代からの無気力を、福祉活動を通じて克服した山崎さん。自閉スペクトラム症の弟がいる家庭にも、学力によるカーストが生まれる進学高校にも居場所がなかったといいます。そんな山崎さんの高校時代を振り返るところからセッションがはじまりました。

山崎さん「通っていた高校はいわゆる進学校で、模試などで低い点数をとってしまうと先生から「なんでこんな問題もわからないんだ」と言われてしまうような、学力がカーストの基準になっている学校でした。そ



んな閉鎖的な空間にいるとやっぱりいじめのようなものがすごく起こるようになるんです。なんとかいじめのターゲットにならないよう自分の保身のことばかり考えて過ごしていました。また、僕の弟が自閉スペクトラム症という人格をもっていて、家で暴れて警察が来たり、親が言いあっていたりで家にも居場所がなく、高校3年生ぐらいになったらもうまったく勉強する気が起きなくなっていました。授業中に手をあげて、「トイレ行ってきます」と言っていて、トイレでアプリの麻雀をしていました。進学校なのに勉強をせずに麻雀ばかりしている僕を、クラスみんなが笑ってくれるようになって。要は僕は奇行をすることでみんなを笑わせるっていう役割を勝手に見つけ出して、毎日を過ごしていたんです。弟は警察、相談所、医療施設などにお世話になりましたが、彼に対する“措置”として福祉のありかたばかりをみてきたので、福祉に対しては疑問を感じながら過ごしていました。にもかかわらず大学で福祉学部に入学したのは、何か理由があったわけではなく、受験勉強を早く終わらせたかったから。でも大原ゼミでゆうゆう塾というものに出会い、そこでのこどもの居場所支援を通じて、こどもたちに必要とされることにより少しずつ無気力が克服されていきました」





小学生から「ラビット」という 新たな生命を授かった

進学高校ゆえに土日も夜8時まで勉強を強いられる毎日のなか、奇行をすることで自分の役割を見つけた山崎さん。無気力のまま大学に入学し、3年生のときにこどもの居場所支援を行う「ゆうゆう塾」に出会ったといいます。その活動を通して、山崎さんはどのようにして前向きな気持ちになれたのでしょうか。

山崎さん「ゆうゆう塾に行ったときに、リーダー格みたいな小学生の男の子がいて、当時僕はうさぎのイラストが描いてあるニットみたいなを着てたんですけど、初日から「ラビット、ラビット」って呼ばれるようになりました。その日から僕はラビットとして新たな命を授かり、無気力な大学生活を忘れて、ラビットという役割を果たすために毎日ゆうゆう塾に行っていました。活動内容は、こどもたちがしたいことをいっしょにやってみて遊んでいました。新しい自分に生まれ変わったという感覚もありましたが、それ以上にこどもたちとの関わりかたで、今までの自分の人生やそこで培った独特なコミュニケーションの技術や価値観。そういうものがないと、僕と同じ関わりかたはできないので、こどもたちから「ラビット」って呼ばれることは、僕の人生を肯定してくれるできごとだったんです」



案外みんなも無気力だった

福祉の現場ではよく、支援する人が実は支援されていることがあります。まさにそれを地でいく体験のようです。ゆうゆう塾に通うようになり、無気力が改善され、大学も1限目から出席できるようになったといいます。

山崎さん「もしかしたらこの体験は、自分以外の人にも起こるんじゃないかと思い、福祉活動に携わっている大学生36人の方にアンケートを行ったところ、無気力を大学生活の中で感じたことがある人というのが72パーセント。そして、福祉活動を通してその無気力が変化したという人が73パーセントもいたんです。やっぱり福祉活動は無気力を

変化させることができるんだ。そんなふうにして福祉に関心をもつようになり、春からは地域包括ケアを軸にしている法人で働くことになりました。そこで、また無気力に戻らないように気をつけながら、いろいろな人に福祉のいいところを伝えていければなと思っています」

弱さも生きづらさも、 笑って語れる場

3人それぞれの苦労や生きづらさ、家族との別れとの向きあいかたや受けとめかたに、参加者それぞれが新たな気づきや新しい気持ちを抱いた時間となりました。重たい問題を重たいまま受け止めるのではなく、笑いながらユニークな視点で「不安」を研究する菅野さん。お家で看取る怖さと幸せを自分のなかで整理し、言語化して話していただいた丹羽さん。受験の競争主義や能力主義によるカーストから無気力になり、こどもの居場所支援を通じて前を向いていった体験をリアルに語ってくれた山崎さん。さまざまな人生の途中で福祉の営みを知り、多様な人の息遣いを肌で感じることを通じて、自分のことも新たに見つけていくような。自分の抱える困難をさらけだし、それをいろんな視点や価値観をもって語りあえる場が、福祉教育のひとつのかたちかもしれない。そんな景色を想像できる学び多いセッションとなりました。



菅野 那乃氏

自称「不登校アマチュア」。中学校3年生のときに父の知り合いのすすめで「当事者研究」に出会う。



山崎 優輝氏

北海道医療大学4年。卒論では、自身の経験をもとに「若者の無気力」に対する福祉活動の有用性について執筆。



丹羽 美貴氏

東京大学前期教養学部文科III類2年。野澤和弘さんが講師の「障害者のリアルに迫るゼミ」の副代表を務める。



御代田 太一氏

障害者のリアルに迫る東大ゼミOB・主任講師。「障害者のリアルに迫るゼミ」のOBとしてコーディネーターを務める。

03

子どもたちと
どう向きあうか

楽しく生きる

大人との出会いが大事



松原 由美氏
早稲田大学人間科学学術院教授

源河 真規子氏
子ども家庭庁長官官房審議官支援局担当

大原 裕介氏
北海道医療大学客員教授 / 社会福祉法人ゆうゆう理事長

第3部では、第2部のセッションで語られた学生たちの声を受けとめながら、福祉現場の実情や若者を取り巻く環境をふまえて福祉教育の意義を考察。増加する若者の自殺や潜在化した見えにくい疎外感や孤独感にどう向きあうのか。弱さを安心して開示できる居場所とコミュニティはどのようにしてつくればいいのか。そんな問題意識に福祉教育がどう有効的に作用するのかといった議論が繰り広げられました。

学生たちの言葉を受けて 福祉との出会いが、 心を揺さぶられる経験に

3人の学生の話はどう受け止めたのか。率直に感じたことを話していただくところから、セッションははじまりました。早稲田大学教授の松原さんは、学生たちが福祉の現場に触れることの意義を感じて、毎年ゼミの合宿で社会福祉法人ゆうゆうの現場を訪問しています。

松原さん「3人のお話から共通して感じたのは、物事が起きたときにそれをどう捉えるかという認識。何か起きたときに、そのできごとが感情をつくるのではなく、認識が感情をつくっていく。これをABC理論と呼ぶんですが、まさにどう認識するかというところで福祉に関わり、自分の軸ができてきたというところ

が非常に興味深く感じました。私が毎年ゆうゆうに学生を連れていく理由はそこなんです。いくら理屈や理論で福祉の心や人権の尊重と言ってもなかなかピンときませんよね。やっぱりリアルに触れて心を揺さぶられてはじめて人や人の気持ちがわかるんじゃないかと思うんです。いろんな価値観があること。いろんな人がいて、支えあっていることが、福祉を通じて知ることができます。リアルに接することで、社会や地域とつながることを学び、自分自身のことも深く知ることができるんだろうなとあらためて思いました」

大原さん「自分も大学時代に会った障害のある方に心を揺さぶられ、今も福祉の世界にいます。心を揺さぶられるできごとに出会い、その後の人生に大きく影響するというのは、いつの時代も変わらないのでは

ないかと思います」

当事者の力、あるいは福祉現場で働く支援者の姿が、心を揺さぶられる経験になる。そのことは、今の若者にとって少なからずあるのではないかと。松原さんのゼミには、無気力だったり、福祉に否定的な気持ちをもったりしている学生もいます。しかし、彼らを福祉の現場に連れていくと、見事に夢中になっていく姿を幾度となくみてきたと語ります。これを受けて源河さんが指摘します。

源河さん「登壇してくれた3人の学生たちは、それぞれいい大人と出会っているなと感じました。子ども家庭庁のスローガンは「子どもまんなか」。子どもを中心において大人みんなで支えていこうということで、子どもの意見を聞くことを大事にしています。その背景として、昨年「子どもの悩みプロジェクト」ということもやっているのですが、一見悩みなんてなさそうな子にもやっぱり悩みがあって、どこに相談したらいいのかわからないという声がありました。そのための取り組みでもあるのですが、現代は子どもたちがすごく生きにくい時代になっていると感じます」

弱さをさらけ出せる安心感 「さらけ出していい」が、 「ここにいていい」に

クラスでいちばん明るい。成績トッ



プで親も裕福。そんな学生の奥底にも、実は誰にも言えない悩みがあることも。そんな若者たちに潜在する苦しみを顕在化するには、どのような視点が必要なのだろう。

源河さん「障害のある子どもも大人も、人を見抜く力がすごくあるじゃないですか。だから接する側の人もちゃんと弱みをさらけ出さないと好かれぬ気がするんですね。そう思うと、山崎さんが子どもの居場所支援の現場で、小学生に「ラビット」として認定され、子どもたちに好かれていくことは、とても象徴的なできごとだったんだと思いますね」

大原さん「福祉や障害のある方を神聖化するつもりはないんですが、福祉の現場のリアルや当事者の生きづらさとの出会いというものが、自分のなかでさらけ出せずに鬱積していた、もしくは蓋をしていた感情を爆発させるといいますか。ここならさらけ出していいんだという安心感があるのかもしれない」

福祉の現場に行くと、人の生き死や、答えのない現場での支援者の試



行錯誤や、ありのままをぶつけてくる当事者の素直さのようなものに否が応でも触れるので、なんとなく自分もさらけ出さなきゃいけないような気分にもなる。それがいいと、源河さんは話します。

看取りから学ぶこと

死と向きあう大切さを、 子どもたちに伝えることも大切

丹羽さんが向きあってきた近しい人の死を受け止めていくということ。福祉の現場にも看取りなど死と向きあうことがあり、ここにもまたひとつ、若者に伝えられる価値があるのではないだろうか。

松原さん「看取りを経験した人は、本人が最後まで生ききる姿をみて、たくさんのことを学ぶと思います。本人のこれまでの人生を感じたり、生きるってどういうことなんだろうと考えたり。血のつながりとか関係なく、それは介護の醍醐味のひとつでもあるように感じますね」

子どもたちにとっては苦しい経験かもしれない。けれど、人の死に触れる経験の重要性はあるはず。

源河さん「子どもの自殺が増えています。大人の自殺が減っているのに、子どもの自殺だけが増えているんです。命の大切さを身をもって知る機会が必要だと感じています」

大人にもはびこる疎外感 子どもにも、大人にも、 福祉教育を

思春期の頃の苦しみや、幼少期のつらさ。そういったことに「当事者研究」というアプローチで向きあう菅野さん。「当事者研究」は、大人たちの目にどのように映ったのでしょうか。

松原さん「その若さで自分自身を俯瞰して客観的にみることができるとに感心しました。そんななか、子どもが減ってるのに自殺の数は過去最高ってどういうことだろう。また、G7のなかで若者の死因のトップが自殺って悲しすぎますね。これはもう福祉だけで解決する問題ではなくて。だけれども、福祉教育を起爆剤に社会を変えていくという可能性はあるんじゃないかと思っています。当事者研究もそうだし、あと、文化をつくるということも重要。たとえば、ひとつの価値観だけで決めつけるのってダサくて、もっといろんな価値観があってよくて、生ききる姿ってかっこいい。そんな文化をつくっていくことが、福祉教育の原点になっていくといいなと」

大原さん「菅野さんの“自分の苦勞や生きづらさを、お菓子を食べながら笑ってくれてる”っていうね。そういうところに大きなヒントがあるんじゃないかという気がして。福



祉教育や当事者研究、障害者のリアルを語る活動は、子どもたちを自然にオープンに誘発していくものになるんじゃないかと思いました」

源河さん「単なる場所ではなく、自分がここにいてもいいんだよと思える場所じゃないと、孤立してしまうかもしれません。おそらく福祉教育は子どもだけじゃなくて、いっしょにいる大人たちにもいい影響を与えているのではないかと思うんですね。今の子どもは自己肯定感が低いと言いますが、大人の自己肯定感も十分低いので」

学校の先生も含めて、大人全体が疎外感を感じているのではないかと。社会全体の個々の疎外感が変わらないと、根本的な解決にはならないのではないかと。そんな議論に進展しつつも時間となり、最後に登壇者それぞれからコメントをいただき、第三部は閉幕となりました。

大原さん「大人の疎外感って、いくら悟られないようにしても、子どもはきっと見抜いていますよね。そういう大人をみて、自分もそうになっていく不安が繰り返されていくのはおそらくあって。けれど、福祉の現場で、大人が障害のある人と向きあって楽しそうに仕事をしている。その姿や世界観というものを、我々現場はつくっていけるんじゃないかと思いました」

松原さん「今日は、若者が自分の弱さをさらけ出して、いきいきと自分らしい言葉を発している姿に勇気づけられました。こういった雰囲気でもコミュニティができていけば地域もカルチャーも世界観も変わっていくんじゃないかなと思いました。まさに福祉が社会とつながり、文化を変えていく力を感じました」

源河さん「福祉教育は、実は大人に重要なんじゃないかと思いました。いつも楽しそうな大人に出会うことができれば、子どもあぁなりたいと思うと思うんですね」



松原 由美氏

1992年東京女子大学現代文化学部卒業。1994年慶應義塾大学大学院経営管理研究科修了。医療経済研究機構主任研究員や明治安田生活福祉研究所研究部長などを経て現職に就任。医療・社会保障・福祉分野における実務と研究の知見から、シンポジウムやメディアなどで専門的な知見を発信している。



源河 真規子氏

1993年労働省（現厚生労働省）入省。イギリス留学、厚生労働省職業生活両立課、障害福祉課、人事課勤務などを経て、2024年7月より現職に就任。子どもと大人が共に社会を創る未来に向けて「子どもまんなかアクションリレーションシップ」を各地で開催。



大原 裕介氏

大学卒業後、NPO法人当別町青少年活動センターゆうゆう24（現在「社会福祉法人ゆうゆう」）を起業。人口減少時代における、あらゆる住民がそれぞれの立場を超えた支え合いによって福祉的实践を構築する共生型事業など、社会に必要とされる様々な実践を創り続け、福祉現場の魅力や魅力を伝え後進者を育成している。



04

幸せに
生きるためのヒント

「誰もがハッピーになる」

を支えるために



村上 靖彦氏

大阪大学人間科学研究科教授

堀田 聡子氏

慶應義塾大学大学院教授

馬場 拓也氏

社会福祉法人愛川舜寿会理事長

「ふだんの暮らしの幸せ」といった意味をもつ「福祉」。実際に福祉と出会えた若者たちは、福祉との出会いを境にそれぞれの人生を豊かにする変化があったと話してくれたように思います。最後のセッションでは、福祉と出会えない構造的課題を指摘するとともに、春日台センターセンターにみられる偶発的な福祉との出会い。そして、子どもたちにも大人たちにも必要な、ハッピーに生きることを支えるための福祉教育の価値や意義が語られました。

福祉と出会いにくい社会

ふだんの暮らしの幸せなのに

村上さん「そもそも若者たちが福祉と出会うには、福祉系の大学に行かない限りはなかなか機会がないんじゃないかと思うんです。一方で、福祉的な支援が必要なはずなのに、出会えていない人も多いように感じます。また、小中高生の自死が過去最多ということからも、子どもが声をあげることができない、声を届ける場所がない社会になっています。これらの背景には、競争や序列化といった社会の構造の問題が根本にあると思うのですが」

フォーラムに登壇してくれた3人の若者は、悩みながらもなんとか福祉と出会えた。ただ一般的な社会では、福祉と出会うそもそもの機会が少ないのが現実。研究者として貧困

地区の児童福祉を調査してきた村上さんはそう指摘します。

村上さん「僕自身、貧困地区で福祉と児童福祉に出会って本当に救われた人間です。福祉に出会って「人になれた」という感じがします。ということかという、恵まれたかたちで競争主義にまみれてきた私に、社会で排除されている人や傷ついている人たちが、生き抜いていく尊さを教えてくれました。コミュニティが生まれるかけがえのなさや、自分が大学の教員でも何者でもなくなれるというか、属性や肩書きを取っ払ったところで出会えることの大事さも感じました」

社会のなかでの属性や肩書きに縛られるあまりに、助けを求めることがどこか恥ずかしいことのように感じている風潮も。

村上さん「声をあげているけれどキャッチされていないことが多いなか、それでもそのSOSの声が届く場所は確かにあって。そこにはスーパーマン的な支援者が一人いるというより、そこでの関係性が一人の声を拾っていくんですね。コミュニティとして声が届く関係性になっていると、みんなに聞こえてくるんだろうなと思います。それはシンプルに目の前にいる人の声を聞くということでもあって、すごく小さな単位からでしかはじまらないことだと思います」

誰かのSOSをキャッチできる人と人との関係を築くこと。それが、福祉と出会うきっかけにつながるのかもしれない。

偶発的に福祉と出会うしかけ 気にかけてあえる日常を編む

神奈川県愛川町。地域で長く愛されたスーパーの跡地に、デイサービス、放課後等デイサービス、コインランドリー、コロッケ屋さんなどの地域共生拠点「春日台センターセンター」を運営する馬場さん。子どもからお年寄りまで、自然と集まれる場所をひらくことにより、ふだんの暮らしのなかで必然的に福祉との出会いが生まれているといいます。

馬場さん「僕らが利用者にお茶を入れている間にも、同じ敷地内で誰かと誰かが出会っているだろうという、環境による支援というものがで



きるのではないかな。そんな考えにもとづいて建てられた場所でもあります。たとえば、昼間なのに畳のところで寝転がった中学生がいて、お昼になったらコロッケ買って食べる。そんなことしてたらコロッケ屋のスタッフが「どうしたの、休みなの？」って聞く。そしたら「学校行かないんだ、俺」という話になって…というふうに、地域でその子を気にかけているようになっていく、みたいなことが日常的にあるんですね」

障害や高齢の分野といった縦割りでは出会うことのできない、福祉と出会う機会を創出している春日台センターセンター。一方で馬場さんは、2019年より地元の学校に福祉教育として出前授業も行っています。現在の高校までの学校教育では、福祉を教わる機会がほとんどありません。偶発的な出会いが自然にあるのが福祉の現場であり、価値観の違う人たちを認めあい、自分を受け入れられるところに、福祉の可能性は広がります。優しさや思いやりという漠然とした福祉観ではなく、もっと福祉の本質に出会ってほしいと指摘します。あらためて、福祉教育の価



値や意義とはどういったものなのだろう。セッションは続きます。

福祉がもたらす若者のしあわせ 学校で学んでこなかった ハッピーに暮らすことについて

村上さん「そもそも福祉教育という言葉聞いたことがなかったんですよね。今日1日お話を伺っていて、僕たちがハッピーに暮らすとはどういうことなのか、というものを学ぶことだと思うんですよね。ところが、そこで気がつくのは、“ハッピーに暮らすこと”については、こどもたちも僕たちも学校で学んでこなかったということ。でも本当はそこがいちばん大事なはずなんですけど、なぜかそれが抜けていたんだと思いました」

単に楽しいというハッピーではなく、話し相手がいるとか、頼れる人がいるとか。そういうシンプルな、それでいてとても大事なことを学ぶ機会が、学校から抜けていたのではと村上さんは指摘します。

堀田さん「菅野さんが言った“みんなでおやつを食べながら、グラゲラ笑って人の苦労話を聞いている”みたいな。弱いところやできないところはできれば隠したい。なぜなら正確にできることが素晴らしいとされているから。けれど、そんなことをいったい誰が決めたんだ？って。



あらためて、弱さをみせたりSOSを出したりしていいと思えることを、どのような環境が支えるんだろうと考えさせられました」

福祉教育で、 ハッピーになるを支える

ハッピーに生きることを支える。それが福祉教育を定義づけるひとつの価値や意義かもしれない。「認知症世界の歩き方」というプロジェクトを通じて、認知症の方にインタビューを続けている堀田さん。そこには、福祉教育に通じるハッピーを支えるヒントがありました。

堀田さん「以前、認知症の方の語りからどんな感情が現れているかを分析したことがありました。その結果、認知症の診断を受けてから5年経過した方たちの感情でいちばん強く現れていたのが「幸せな感情」だったんです。認知症になっていない方々は、認知症の方は「恐れ」の感情を抱いていると思込みがちなんですけど、認知症と共に暮らしながらも、幸せの感情を強くもっている。じゃあその幸せの種はなんだろうと検証してみたところ、苦手なことが増えてきても視点やとらえかたを変え、周囲の手をかりるなどさまざまな工夫をしながらハッピーにたどり着いているということがわかったんです。こうした幸せを見つけるためのさまざまな工夫に出会っていく



ことも福祉教育のひとつと面白いのかしら、なんてことを考えていました」

馬場さん「現代は多くの家庭が核家族ですが、昔は経験学習として近所の方の老いや人の変化を感じることができました。また、障害のある人、志村けんでいう変なおじさんがまちなかから排除されずにいた時代というものがありません。ところが福祉サービスが整えば、途端にデイサービスやショートステイなどに入っていき。そうなったときに、じゃあ社会はどうなっているのかということ、僕は考えなきゃいけない。制度が整ったからこそひらいていく。そして、それは何のためにやるのかということ、こどものためだと思っています」

村上さん「春日台センターセンターで起こっているような偶発的な出会いの場というのは、本当に大事ですよ。ケアや福祉を成り立たせるためには、偶然ってすごく大事だし、偶然の出会いをキャッチして、そこから何か生まれていくということがすごく大事ですよ」

閉塞的な社会のなかでは、誰かのSOSの声を拾いあえるコミュニティづくりが大切。そこでのさまざまな福祉との偶発的な出会いを、春日台センターセンターでは意図的に作りあげていること。福祉との偶発的な出会いには、一人ひとりがそれぞれ求める「ふだんの暮らしの幸せ」を見つけるための多様な価値観があります。「じわっと感じる幸せの根っこにあるものを紐解いていくことがとても大事なんじゃないか」という堀田さんの言葉にあるように、自分のありのままの心が感じる小さな幸せってなんだろうと多様な価値観から掘り下げていけること。そこには、自分の抱える困難を受け入れながらも、幸せを求めるポジティブな強さがあり、それも福祉教育のひとつの側面ではないだろうか。そんな気づきを与えてくれるセッションでした。



堀田 聡子氏

慶應義塾大学大学院健康マネジメント研究科教授（医学部・ウェルビーイングリサーチセンター兼任）、認知症未来共創ハブ代表。博士（国際公共政策）。社会保障審議会・介護給付費分科会及び福祉部会委員。中学生の頃より、おもに障害者の自立生活の介助を継続、より人間的で持続可能なケアと地域づくりに向けた移行の支援および加速に取り組む。



村上 靖彦氏

大阪大学感染症総合教育研究拠点CiDER兼任教員。専門は哲学および現象学的な質的研究。2000年パリ第7大学で博士号取得（基礎精神病理学・精神分析学博士）。著書に『客観性の落とし穴』（ちくまプリマー新書）、『鍵をあげはなつ介護・福祉における自由の実験』（中央法規出版）などがある。



馬場 拓也氏

社会福祉法人愛川舜寿会理事長／洗濯文化研究所代表。日本社会事業大学大学院福祉マネジメント修士課程修了。大学卒業後、イタリアのファッションブランド「ジョルジオアルマーニ」にてトップセールスとして活躍した後、2010年に2代目経営者として現法人に参画。高齢者介護、障がい福祉、寺子屋、シェアオフィス、コインランドリー、コロケ屋などが集う地域共生拠点「春日台センターセンター」を運営。

Achievements

昨年度は全国の9,892人の子どもたちに実施しました

[学校・施設数76校・施設／実施回数128回／受講者人数 延べ9,892名]

北海道

社会福祉法人ゆうゆう <https://yu-yu.or.jp/>

市立札幌平岸高等学校	社会のリアルとわたし(職業コラボレーション「福祉×○○」)	北海道札幌西高等学校	キャリア探究学習(課題解決プログラム/持続可能なまちづくりとは)
市立札幌開成中等教育学校	社会のリアルとわたし	北海道札幌国際情報高等学校	社会のリアルとわたし(ビジネスの観点からの福祉)
和寒町立和寒中学校	社会のリアルとわたし(誰もが暮らしやすいまちづくり/認知症キッズサポーター養成講座)	北海道登別明日中等教育学校	社会のリアルとわたし(福祉の観点からのSDGs、世界と日本・北海道とのかかわり)
和寒町立和寒小学校	社会のリアルとわたし(誰もが暮らしやすいまちづくり/認知症キッズサポーター養成講座)	和寒町(ふくしワークキャンプ)	和寒町でのフィールドワーク、特別養護老人ホーム入居者の方々とレク等

岩手県

社会福祉法人みちのく大寿会 <https://m-kujihirasou.jp/>

洋野町立大野中学校	プログラム「スカイランタンに夢を描こう」	岩手県立北桜高等学校	DET障害者平等研修
洋野町立大野小学校	プログラム「スカイランタンに夢を描こう」	岩手県立久慈翔北高等学校	DET障害者平等研修
洋野町立林郷小学校	プログラム「スカイランタンに夢を描こう」	岩手県立大野高等学校	高校と特別養護老人ホームの合同防災訓練/大野高校映像研究会(地元をPRする)/プログラム「スカイランタンに夢を描こう」
洋野町立帯島小学校	プログラム「スカイランタンに夢を描こう」		

山形県

医療法人社団みつわ会 <http://mituwakai.com/>

酒田市立第四中学校	「経験が価値になる」
鶴岡市立鶴岡第二中学校	「経験が価値になる」「本当の優しさとは」
鶴岡東高等学校	「経験が価値になる」
鶴岡市立黄金小学校	「未来をつくる福祉の力ー 価値をつくる・見出す考え方」
山形県立鶴岡中央高等学校	「経験が価値になる」

宮城県

社会福祉法人ライフの学校 <https://gakkou.life/>

仙台市立六郷小学校	みんなで学ぼう 福祉教育
仙台市立沖野小学校	福祉について

新潟県

社会福祉法人みんなできる <https://www.minna-de-ikiru.org/>

上越市立大和小学校	障害とアート
上越市立大湯小学校	障害とアート
上越市立諏訪小学校	障害とアート
上越教育大学付属小学校	障害とアート

富山県

合同会社HUGKUMI <https://www.hugkumi-llc.com/>

富山県こどもみらい館	「ふっつう」ってなあに?/COCOPELLIさんとアートで遊ぼう
Ponteとやま	「ふっつう」ってなあに?

千葉県

社会福祉法人千葉 <https://www.chiraku.com/>

千葉県立四街道北高等学校	発達障害について/虐待防止と良い支援
千葉県立千葉女子高等学校	貧困と虐待/発達障害と多様性
千葉県立成東高等学校	発達障害について
植草学園大学付属高等学校	発達障害について/地域共生と障害者支援/多様性と社会/障害者と地域生活

神奈川県

社会福祉法人愛川舜寿会 <https://aikawa-shunjukai.jp/>

愛川町立愛川中原中学校	クリエイティブな介護実践による介護のリアル(重度の障害児の母親)	愛川町立中津小学校	クリエイティブな介護実践による介護のリアル(児童指導員と医療的ケア児など)
神奈川県立相模原城山高等学校	クリエイティブな介護実践による介護のリアル(社会福祉士とOB訪問)	川崎市立高津高等学校	クリエイティブな介護実践による介護のリアル(地域福祉とまちづくり)
神奈川県立大井高等学校	クリエイティブな介護実践による介護のリアル(新卒介護職)	愛川町立愛川東中学校	クリエイティブな介護実践による介護のリアル(地域福祉とまちづくり)

静岡県

社会福祉法人ほなみ会 <https://www.h-minamikaze.com/>

浜松市立新津中学校	福祉施設の防災を知る	浜松市立白鷺小学校	キャリア開発(福祉講話)	法人施設内実施	福祉のお仕事学び体験ツアー
鹿島学園高等学校	セミナー、介護機器体験	磐田市立向陽中学校	セミナー、介護機器体験	静岡県社会福祉協議会イベント	介護体験
浜松市立中ノ町小学校	キャリア開発(福祉講話)	静岡県立浜松西高等学校	福祉講話		

愛知県

社会福祉法人半田市社会福祉協議会 <https://handa-shakyo.com/>

半田市立有脇小学校	「ふ・く・しの話」ワーク「自分のまわりにいる『みんな』どんな人がいるかな」	半田市立板山小学校	「ふ・く・しの話」	愛知県立半田農業高等学校	いのちの大切さ
半田市立乙川中学校	当事者の理解と体験(肢体・視覚・聴覚)	半田市立さくら小学校	当事者の理解と体験(肢体・視覚・聴覚)		

滋賀県

一般社団法人ぼくみん <https://bokumin.jp/>

滋賀県立安曇川高等学校	「ふくし」ってなに?～人とワガママから福祉を考える～/障がい当事者と福祉職の声に触れてみる	第3学童保育所	一緒に手を動かして障がいと出会う
TAKASHIMA BASE	小学生時代を振り返り、福祉教育を考える	社会福祉法人ゆたか会(連携)	“地域”って、どこだ?～福祉施設に潜入～

京都府

社会福祉法人みねやま福祉会 <https://www.mineyama-fukusikai.jp/>

京丹後市立丹後中学校	福祉講話	京丹後市立大宮中学校	地域探求講話/フクシのしごと	京都聖母学院高等学校	BeReal.フクシ	京都府立宮津天橋高等学校	キャリア教育
------------	------	------------	----------------	------------	------------	--------------	--------

大阪府

NPO法人み・らいず2 <https://me-rise.com/>

大阪府立箕面東高等学校	ひとりひとりのちがいを知る 大学生の語りの授業	大阪府立鳳高等学校	ひとりひとりのちがいを知る
大阪府立東住吉総合高等学校	ひとりひとりのちがいを知る	堺市立南八下中学校	ひとりひとりのちがいを知る
大阪府立東百舌鳥高等学校	ひとりひとりのちがいを知る 大学生の語りの授業	大阪府立成美高等学校	ひとりひとりのちがいを知る 大学生の語りの授業

福岡県

一般社団法人まるごとスタイル

大牟田市立甘木中学校	認知症絵本教室・福祉教育	大牟田市立中友小学校	認知症絵本教室・福祉教育	大牟田市立吉野小学校	認知症絵本教室・福祉教育
大牟田市立松原中学校	認知症絵本教室・福祉教育	大牟田市立手鎌小学校	認知症絵本教室・福祉教育		

長崎県

社会福祉法人南高愛隣会 <https://www.airinkai.or.jp/>

長崎県立大村城南高等学校	若手従事者×福祉	長崎県立小島中学校	障がいについてのワークショップ
長崎県立島原翔南高等学校	若手従事者×福祉	瓊浦高等学校	芸術×福祉

沖縄県

波と風と合同会社(ヒューマンライブラリー沖縄) <https://sites.google.com/view/human-library/>

糸満市立西崎小学校	多様性を知る
琉球大学	県内高校生向けプログラム(自己受容)

Satisfaction

プログラム満足度

とても満足・やや満足
76% 学生
97% 教員

福祉・介護のことを
 もっと知りたいと思った

78%
 学生

関心度

プログラム
 実施前

32% 学生
74% 教員

上昇率
39%

プログラム
 実施後

71% 学生
99% 教員

上昇率
25%

福祉・介護施設等への

見学・体験イベントに参加してみたい

70%
 学生

今後も機会があれば

授業で福祉教育プログラムを実施したい

99%
 教員

Voice

生徒の声

どのようなものか初めはよく分からなかったが、どのような事をしているのか分かったと、人を助けているたいせつなものなんだなと思った。(小学6年生)

特別扱いしないという言葉が心に残りました。何かしてあげた方が良いのかなと思ってたけど、全部手伝うのではなく自分でできないことをするのがいいと思ったからです。(中学2年生)

これから、福祉には自分はまったく関係ないなどの考えを持たずにたくさんの視点から物事を考えることが大切ということを知りました。(中学2年生)

足の悪い祖母がいるのですが、いつも手を貸しているだけで、じっと見ているだけで何もしてあげられないことが多かったです。ずっと何かしてあげたいと思っていても、何もしてあげられないからできませんでした。ですが、今回の福祉講話では、何もしてあげないじゃなくて、何かをしてあげるように努力をするということが学べて新しい意見を持てるようになりました。(中学2年生)

先生の声

講師の方や支援してきた方の生き方を通して、自分はどのように生きるべきかを考える機会となりました。人生の岐路にある高校生に、このような心に訴えかけるお話を伺う機会をいただきましたことは大変貴重であり、進路選択の幅を広げることにつながりました。(札幌国際情報高等学校)

今回のお話から誰もが苦手なことがあること、その逆で得意なことがあることを理解し、得意なことも苦手なことも認め合って生活できるクラスにしていきたいと思いました。また、成長過程で高い壁にぶつかった時に、今回のお話を思い出して、勇気をもって何にでもチャレンジしようとするこどもたちを育てたいと思いました。(大和小学校)

見せていただいた沢山の作品が全て、障害のある方が作ったものだとか知ったときのこどもたちのおどろきから、尊敬する姿まで見ることができた。こどもたちの「おどろき」や「すごい!」と感じた瞬間がありました。こどもたちの心に残り続けると思います。(大湊町小学校)

From Student

ポジティブに人を捉えていくという考えには、福祉を超えて社会全体に価値があると感じました。(中学3年生)

「誰でも生きづらさを抱えている」という言葉を聞いて何だか安心しました。自分自身、できないことに目を向けがちなので、できることを探して目を向けてみようと思います。(中学3年生)

福祉に対するイメージがかなり真逆になった。福祉には介護とか医療みたいなイメージがずっとあったけどそのようなイメージに当てはまる特定の人じゃなくても福祉には関わられるし、今までも知らずのうちに関わっていたんだなと思った。福祉の幅広さに驚かされた。(高校1年生)

個性や多様性と言いながらも、平均を求めてしまう社会をもっと変えていきたいと思った。(高校1年生)

自分は一時期不登校だったのですが今回の話を聞いて今度は「自分自身が誰かの居場所になりたい」と思うようになりました。(高校1年生)

From Teacher

中学校の中でも、もしかしたら世の中全体が自分という「個人」を生きるためだけに疲弊してしまって、共に生きるための大切なことを見失ってしまっている社会になってきてしまっているのかもしれない。「個人」を大切にすることは、「他をも認めること」、他も認めながら、共に手を取りながら生きることこそ、今の時代失ってはならないことだと思います。無関心を貫くのではなく、伸ばせる手を相手へとつないでいく、そんな人とのつながりを、隔たりなくつなぐことが福祉なのではないかと思いました。(愛川中原中学校)

生徒が奉仕活動をする機会がありますが、そのときに真に他者を想った行動がとれるかを考えることが大切だと思いました。できないことよりもできることを活かすという視点は、教員をしているときにもこどもに対して意識したいと思います。(開成中等教育学校)

「職員と家族の距離を近づける」という発想は、もっと学校にも必要なんじゃないかと感じたお話でした。(愛川中原中学校)

子どもたちの心をゆさぶるリアルな出会いを通して、
 福祉へのイメージも、より自由に、ポジティブに、多様なものに変化しました

活動にご興味のある方へ

「わたしのリアル」はじめませんか。

—— 15,000人の生徒に「わたしのリアル」を ——

2025年度は延べ約10,000人の生徒に福祉教育を届けることができました。「わたしのリアル」は、こどもの心をゆさぶるリアルな出会いの体験を通して、こどもたちの生きづらさを受けとめながら、生きる力を育むことをめざしています。

今後も福祉の啓発・魅力発信であり、こどもの心をゆさぶる「わたしのリアル」を、全国の小中学校でより普及していくために、学校現場の先生や福祉教育を展開する福祉団体との協働、もしくは活動そのものを支援してくれる企業・団体等との協働をしていきたいと思っています。

「福祉教育を取り入れたい」「福祉のリアルを伝えたい」「寄付で応援したい」という方は、お問い合わせ先のアドレスよりご連絡いただけますと幸いです。

お問い合わせ先 fukuthink@f2f.or.jp

[担当] 世戸口 (社会福祉法人ゆうゆう)

運営団体

一般社団法人 FACE to FUKUSHI

「福祉に関わる人をふやす」ことをミッションに、福祉と人をつなぐさまざまな事業を展開しています。福祉との接点をつくり、福祉を担う人を育て、業界全体でよりよい福祉をめざすこと。また、支援現場で働く人がやりがいを感じながら働き続けられる環境づくりに貢献すること。これらの取り組みを継続することで、「支援が必要な人へ必要な支援がとどけられる社会」の実現をめざします。

●教育関係者の方

学校で福祉教育を取り入れてみませんか？

福祉のリアルと出会い、こどもの心をゆさぶる福祉教育の導入に関心のある先生は、まずは下記事務局までお問い合わせください。

事務局よりご希望の内容等を伺い、プログラム実施に向けて相談・調整をさせていただきます。

●福祉団体の方へ

福祉のリアルを伝え、こどもに寄り添う福祉教育を実施しませんか？

小中高校等での、福祉のリアルを伝える福祉教育の実施に関心のある方は、下記事務局までお問い合わせください。

事務局よりプロジェクトの理念・概要についてご説明をさせていただき、実施に向けた相談をさせていただきます。

●プロジェクトを応援したい方へ

寄付等でプロジェクトにご支援いただけませんか？

こどもの心をゆさぶる「わたしのリアル」の全国的な普及にご支援いただける企業・団体の皆様は、下記事務局までお問い合わせください。

事務局よりプロジェクトの理念・概要について説明をさせていただいた後、寄付等のご協力内容についてご相談させていただきます。

わたしのリアル
プロモーション動画



Webサイト



社会福祉法人 ゆうゆう

“ひとりの想い”を文化にする”を理念に、子育て、介護、障がい者支援、生活困窮者支援など、分野を問わず地域に必要な福祉事業を行っています。人口減少時代における、あらゆる住民がそれぞれの立場を超えた支え合いによる福祉の実践を構築する共生型事業や、国内外のオール・プッシュ事業の発信、民間活力を活用した社会的事業の研究など社会に必要とされる実践を創り続けています。

【お問い合わせ】一般社団法人 FACE to FUKUSHI

北海道事務局 (社会福祉法人ゆうゆう内 担当: 世戸口)

〒061-0231 北海道石狩郡当別町六軒町70-18 [✉ fukuthink@f2f.or.jp](mailto:fukuthink@f2f.or.jp) <https://fukuthink.jp/>



Supported by  THE NIPPON FOUNDATION